

所 感

宇 大 農 近 藤 正 巳

昭和23年頃、推計学なる言葉が新聞にでた。

非常に耳新しい言葉で、新聞記事を一生懸命よんだ記憶がある。統計学なるものも、学校時代にわずかに、相関係数、相関比、平均値と標準偏差（その簡易計算）を測樹実習に関連して嶺先生に教えて頂いたきりで、その頃の書物としては、河田杰博士の「間伐と林内簡易統計」、安田倫也「生物測定学」ぐらいであった。「生物測定学」は興味を持って読んだが、いまから思えば記述統計学のものであろうから、その点の物足りなさはあったようである。卒論が「樺太天然林の構成状態」で、胸高直径と樹高の関係やら、本数分配やら、また10×10mのコドラート調査で、小田寒の山の中で単調な調査を何十日もくり返した。その前年は故米田技官の助手で、全羅南道の演習林の広葉樹林の調査をしているが、朝鮮の方が印象に残っているのは、帰りがけに京城まで廻ってきたことと、赤茶けた半島の景観、智異山の頂上にでてそこに忽然と讚美歌のきこえる別天地（外人居住）があり、朝鮮南海岸がよく見えたことなどによるものかも知れない。樺太からの帰りがけには、山中より海岸へ出てオホーツクの海の寒々とした色を見たら里心がついて国境も見ずに帰ってしまった。途端に英独開戦して第二次大戦が始った。（昭14.9.3）

前後するが、1年の夏休み、八ヶ岳の山の中をのんびり故猪熊先生に引率されて、葉っぱをちぎって歩いている中に（7月7日）日支事変が始って14日頃帰京したら街の中が軍事色一色になっていた。平和な八ヶ岳山塊の旅と対照して印象深かった。

前掲の卒業論文は、後日、疎開にともない紛失ということになっていたが、ごく最近研究室より発掘されて残念？ともいうべきか。

さて、戦後の本は、北川先生の「推計学の認識」は、始めてではむづかしく、増山先生の「少数例」もとっつきにくく、その点では畑村、奥野両氏の「標本調査法入門」ありがたい本であった。昭和24年の内地留学で東大経理でそこにある本をよんだり、増山先生の講義を聴講したりしてすごし、その関係で昭和25、26年と農林省

統計調査部の委託で素材量推計調査の予備調査を行った。台帳面積により階層を分けても、一世帯当り年間量のバラツキがいかにか大であるか、それは農事試験、農業のサンプリングの常識を超えるものであることを思い知らされた。標準木法を推計学的立場からつづいた論文を提出してから昭和28年より学友の梅田技官（当時秋田局作業課長）の所へ学生のアルバイトをたのんで、ついでに一緒に山を見せて貰いそのことより一連の標準功程調査の実験計画が始った。

工場実験とちがい、解析単位としての一組のデータをあつめるのにどれだけの時間、経費、手間にかかるものであるか、また労働というような個人差のあるものが、山の地形の複雑さとからみ合って大きな残差分散との対決は楽ではなかった。

40年代になって統計研究会の毎夏の調査は有益なたのしいものであった。秩父、高尾らはまとまった報告はでなかったが、43年のチミケップ、10月よりの総研（天然林）と「サイノメ切り」がつづいた。かって昭和24年頃のそれはHaseiの真似であり、わずかに2.56ha（科研）にすぎなかったが、木梨先生は大規模に白髪岳で行われた。（営林局）そしてまとまった報告がでている。しかし森林調査（蓄積）は、方形材積のバラツキより出発してまたこれにもどるものであろうか、樹木位置図、更新樹調査はともないながらもやはり「方形切り」にたよらざるを得なかったようである。航空写真の飛躍的な進歩によって格段の新しい方法の展開が望まれる。またコンピューターの進歩によりシュミレーションが盛んに行われている。私はこの方面にうといのであるが、どんなモデルがよいかは、現実の森林の姿をいかによく認識するかに依存するのであろうから、両々相まって進歩すべきものだろう。西沢先生のニューゼーランドの土産話にあちらの測樹学者には、相関連した目標があつて今年はこちらまで、5ヶ年間にはここまでという風に研究するというような、良い意味の「統制」がとれているという。このような方法も、現在の測樹方面では望ましいことではないだろうか。経費のカベはあるにしても、たとえばこの会報を情報の交換場所として相たずきえて研究してみたい。そのために会費が上つても、結構だし、したがってまた会員数が減じても仕方があるまい。

林学における統計的考えの普及に力を入れる時代は去つたと考える。

ついでにもう一つ。外国文献の翻訳をしていて印刷している所もある筈だが、抄訳ではなしに測樹と林業の統計関係が配布できないものだろうか。手許にある雑誌は数が知れているし、また別々に訳するのも時間の浪費である。以上、甚だ口はばったいことばかり述べて恐縮だが、一応こんなもので責任を果たさせて頂く。